

## 木造聖観音菩薩坐像について

1. 名称及び員数 木造聖観音菩薩坐像 1 軀
2. 所 有 者 宗教法人如法寺
3. 製 作 年 代 14世紀の南北朝時代の製作と考えられる
4. 作 者 不明(院派の仏師の作か?)
5. 法 量 像高45.3cm
6. 形 状  
髻を高く結びあげる。元結紐下二条、髻を布で覆う。地髪部は束ね目をあらわし、毛筋を彫出する。天冠台彫出。天冠台に髪を絡める。宝冠をつける。白毫相(現状欠損)。耳朶環状。三道相。胸飾をつける。衲衣を通肩にまとう。左手屈臂して腹前で未敷蓮華をとり、右手屈臂して胸前にあげ、第一指と第二指を捻ずる。結跏趺坐する。
7. 構 造  
木造寄木造。内刳りあり。玉眼嵌入。  
頭体幹部を前後に寄せ、割首を行う。髻別材。両体側部を寄せる。両脚部に横一材、裳先に一材を寄せる。体幹部前面材下部に心束を残す。体幹部前後を束で繋ぐ。両袖両手先を寄せる。  
表面白土下地彩色。肉身部金泥塗り。一部盛り上げ彩色。天冠と両肩の髪の表現と瓔珞と両足の金具金銅製。  
胎内黒塗り。
8. 保 存 状 態  
表面彩色については、造像当初のものが残されており、非常に保存状態がよい。盛り上げ彩色については、経年によって弱ってきている。天冠は造像当初の南北朝の様式がしっかり残されており、非常に貴重である。そのほか、装身具、像内黒漆塗りは当初のままかと思われる。  
髻、持ち物、光背、台座は後補。  
全体的に見て、年代を経てきて、彩色や構造は弱ってきているものの、保存状態がよく、造像当初の状況がよく残されていて、非常に貴重な仏像である。
9. 管 理 状 況  
この仏像は如法寺鳥追観堂のお前立像であり、同観音堂内に安置している。



木造聖觀音菩薩坐像

## 三十三応現身立像について

1. 名称及び員数 三十三応現身立像 21軀

2. 所有者 宗教法人如法寺

3. 製作年 至徳元年(1384)

4. 作者 「大和朝春」という仏師

5. 法量 別紙のとおり

6. 三十三応現身立像とは

観音菩薩は救済すべきものの境遇や能力に応じて、それにふさわしい三十三身の姿に  
応化して一切の生き物を救済するという。その姿を現したものが「三十三応現身立像」であ  
る。

7. 構造

一木造、玉眼嵌入、白土地彩色とする。

各像ともほぼ同じ構造で、基本的な構造は頭頂より頭体、足柄まで一材で彫出する。両  
腕まで頭体材より彫出する例が多い。内刳は施さない。頭頂より両頬を通る線で面を割矧  
ぎ、頭頂と顎下で各1本の竹釘でとめる。台座は別材とし、両足裏の柄で像を立てている  
が、⑬居士女身のみ台座まで一材より彫出している。像の動きに応じて、一材からでは彫  
出が困難な部分に小材を矧ぎ足している。

なお、現存する21軀の像は技法や造形がほぼ等しいので、すべて同時期、同一の仏師  
によって造立されたものと考えられる。

8. 墨書銘について

⑥小王身の像内頭部に墨書銘がある。湾曲した荒く刳られた面に記されていることもあ  
り、字体が明確でないが、早稲田大学會津八一記念博物館から発見された童女身の墨書  
銘から「至徳元年 十月廿八日 造 大和長(朝)春」と判読できることがわかった。なお、至  
徳元年は1384年であり、製作技法などから想定される造立年代の範囲内に入る。

また⑳迦楼羅身にも「至徳元年 九月廿七日 造 大和朝春」の墨書銘があることも判  
明した。

## 9. 保存状態

表面彩色も造像当初のものとも考えられ、保存状態もよく、非常に貴重な像である。

## 10. その他

- ・三十三応現身立像は全国的にも数例しかない非常に貴重な像種で、福島県内では如法寺のほかに会津美里町の法用寺で確認されている。現段階で銘文などから製作年がわかるものの中では、如法寺の三十三応現身立像が日本で一番古いものとなる。
- ・三十三応現身立像は現在、鳥追観音堂の須弥壇の左右両端に分かれて安置、保管されている。

(別紙)

### 三十三応現身立像 像高

| 名 称     | 像高(cm) |
|---------|--------|
| ① 仏身    | 31.4   |
| ② 辟支仏身  | 32.8   |
| ③ 梵王身   | 33.6   |
| ④ 大自在天身 | 35.7   |
| ⑤ 天大將軍身 | 33.3   |
| ⑥ 小王身   | 34.9   |
| ⑦ 居士身   | 34.9   |
| ⑧ 宰官身   | 34.9   |
| ⑨ 婆羅門身  | 33.5   |
| ⑩ 比丘尼身  | 32.3   |
| ⑪ 執金剛身  | 35.9   |
| ⑫ 優婆塞身  | 35.3   |
| ⑬ 居士女身  | 35.7   |
| ⑭ 婆羅門女身 | 33.8   |
| ⑮ 童男身   | 33.5   |
| ⑯ 龍身    | 37.3   |
| ⑰ 夜叉身   | 35.0   |
| ⑱ 乾闥婆身  | 34.2   |
| ⑲ 阿修羅身  | 38.0   |
| ⑳ 迦楼羅身  | 34.7   |
| ㉑ 緊那羅身  | 33.6   |

参考 台座高2.4～4.3cm



① 仏身



② 辟支仏身



③ 梵王身



④ 大自在天身



⑤ 天大將軍身



⑥ 小王身



⑦ 居士身



⑧ 宰官身



⑨ 婆羅門身



⑩比丘尼身



⑪執金剛身



⑫優婆塞身



⑬居士女身



⑭婆羅門女身



⑮童男身



⑯龍身



⑰夜叉身



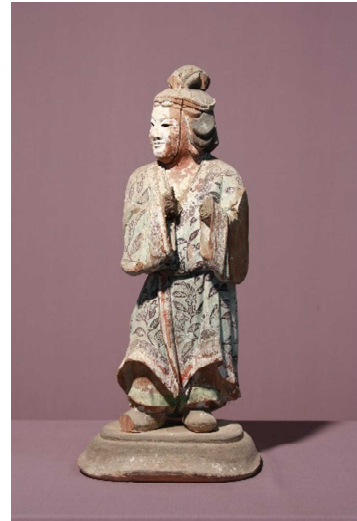
⑱乾闥婆身



①⑨阿修羅身

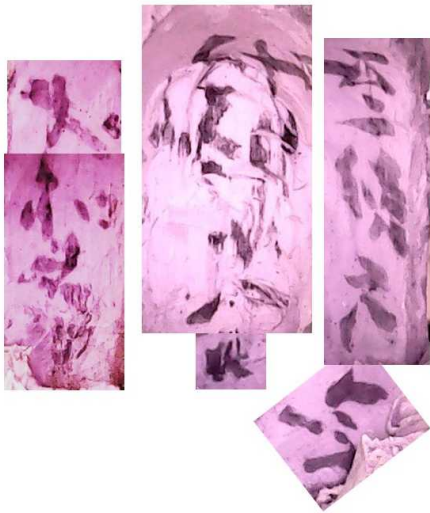


②⑩迦楼羅身



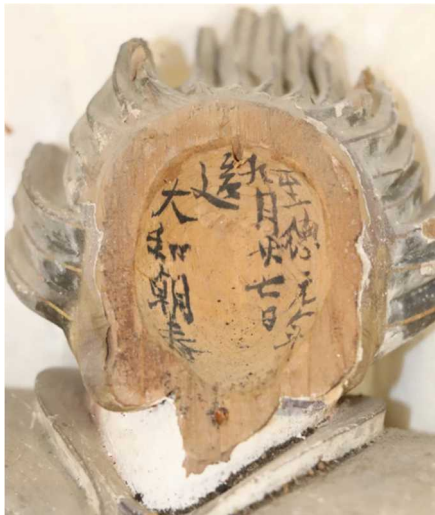
②⑪緊那羅身

⑥小王身像の墨書銘



至徳元年  
十月廿八日  
造  
大和長春<sup>(朝)</sup>

②⑩迦楼羅身像の墨書銘



至徳元年  
九月廿七日  
造  
大和朝春

## 早稲田大学會津八一記念博物館の三十三応現身像について

現在、三十三応現身立像は如法寺に 33 軀のうち 21 軀が確認されており、残りの 12 軀は所在不明となっていたが、そのうちの6軀が早稲田大学會津八一記念博物館に保管されていたことが判明した。像の様式、技法、像高などから一具のものであると判断し、また童女身の頭部内削り面から如法寺のものと同様に「至徳元年 九月廿七日 造大和朝春」の墨書銘が確認されている。



優婆夷身(像高 34.0cm)



比丘身(像高 33.1cm)



童女身(像高 34.7cm)



長者身(像高 35.2cm)



長者女身(像高 34.6cm)



毘沙門身(像高 35.6cm)

童女身像の墨書銘



至徳元年

九月廿七日

造

大和朝春